ニューカマー第二世代のトランスナショナルな生活と教育達成

―日本の大学を卒業したあるブラジル人女性の経験に注目して―

Transnational life and educational attainment of the young Brazilian second generation in Japan

児島　明 KOJIMA Akira（准教授・発達科学講座）

キーワード：トランスナショナルな生活 transnational life, 教育達成 educational attainment, ブラジル人 Brazilian, 第二世代 second generation

1 課題の設定

本稿の目的は、ニューカマー第二世代の教育達成にトランスナショナルな生活がどのような影響をおよぼすかについて、日本の大学を卒業した一人のブラジル人青年の生活史をもとに検討することである。

ブラジル系ニューカマー第二世代の高校在学率の低さについてはかねてより指摘されてきたが（たとえば、大曲他 2011）、それでも確実に上昇傾向にあり、2010 年国勢調査をもとに分析をおこなった高谷らによれば、「5 年前も日本にいた」（すなわち「中学校の 3 年間を日本で過ごしているはず」の）ブラジル籍 17 歳の高校在学率は、2000 年からの 10 年間で 30%から 50%に上昇している（高谷他 2015, pp.52-53）。また、それにともなって大学・大学院への進学者も増えており、2010 年の大学・大学院在学率は、最も高い 19 歳で 15%程度であるものの、18 歳から 22 歳にかけて途切れることのない「山」が確認され、「日本で学ぶブラジル籍の子どもたちが（夢ではなく目標として）大学進学を志す時代がようやく到来したと言える」とされている（高谷他 2015, pp.54-55）。このような変化を、第二世代の日本社会への統合の進行として理解することも、一定程度可能かもしれない。

だが他方、ブラジル系ニューカマー第二世代については、トランスマイグラントとして「ゆきつもどりつの、あるいは多方向性を有する進路形成」（児島 2016, p.217）をおこなう存在であることに注目した研究も蓄積されつつある（ハヤシザキ他 2013, 児島 2016, 山本 2014, 山ノ内 2016 など）。それらの研究では、ブラジルと日本を行き来しながらの、あるいは、ブラジルや第三国への移住を見据えた進路形成のありよう、さらには、実際にブラジルへ帰国した若者のその後の進路について報告がなされてきた。こうした観点からなされる研究の意義について、ハヤシザキらは、「日本への社会統合という観点からはときに誤っているようにみえても、移動を前提にしたときには合理的な戦略があるということ」（ハヤシザキ他 2013, p.256）があきらかになり、「多国間にまたがって生きる人びと」を想定した「新たな教育学」の構想につながると述べている（ハヤシザキ他 2013, p.258）。

ここで浮かびあがってくるのが、日本での教育達成とトランスナショナルな生活とは、たがいに相容れない関係にあるのか否か、という問いである。上述したハヤシザキらの主張には、日本での教育達成のみに焦点化した指導や支援が支配する現状への鋭く、かつ的確な批判が含まれている。しかし他方で、日本での教育達成とトランスナショナルな移動が二項対立的にとらえられることにより、両者がたがいに作用しながら同時に達成される可能性に目が届きにくくなってしまっている点は否めない。

スミスは、ニューヨーク在住のメキシコ系第二世代のなかには、親の故郷を訪問したことをきっかけに、その地の人びとや文化とのつながりを強く意識するようになり、親の苦労に報いるべく努力し、アメリカ社会において高い教育達成や職業的な成功を果たす者がいることをあきらかにしている（Smith 2002）。「新たな教育学」の構想が、「日本での教育達成」の内実をトランスナショナルな文脈のもとで読み替えていく作業を含むものだとすれば、ブラジル系ニューカマー第二世代の進路形成におけるトランスナショナルな生活とホスト国での教育達成の両立の可能性とその条件について検討することも必要であろう。

そこで本稿では、トランスナショナルな生活を送りながら日本で高い教育達成を果たした一人のブラジル人女性に注目し、上記の課題に取り組むことにする。具体的には、以下の三つの観点から分析を進める。第一に、ブラジル系ニューカマー第二世代としてのトランスナショナルな生活のありようを、親世代の意思を反映した「帰国の物語」との関連で描出する（第 4 節）。第二に、トランスナショナルな生活が第二世代の学校適応や教育達成にどのように影響するかを詳細に記述する（第 5 節）。第三に、教育達成を支える学校内外の諸資源とその機能について検討する（第 6 節）。

2 研究の対象と方法

本稿では、2 歳で家族に連れられて来日して以降、複数回の一時帰国を経験しながらも、学齢期を一貫して日本の学校に通って過ごし、23 歳になる現在、国立大学大学院に通うマリ

アーナさん（仮名）の生活史をとりあげる。筆者は2017年7月、関東地方に所在するマリアーナさんの在籍校を訪問し、約3時間のインタビューをおこなった。聴きとった内容は了承をえたうえでICレコーダーに録音し、後に文字に起こした。質問項目は、来日の経緯、家族の生活状況、学校経験、就労経験、エスニック・コミュニティとのかかわり、帰国の有無、将来展望など多岐にわたったが、本稿では、日本においてさまざまな障壁に直面しながらも、高い教育達成を可能にした諸条件の解明を主たる目的とし、その目的に資する範囲で学校内外の諸資源の役割について触れることにする。

ここで、マリアーナさんと彼女の家族のプロフィールについて簡単に紹介しておこう。マリアーナさんは、スペイン系の父（現在70歳）と日系3世の母（現在50歳）のもと、サンパウロ州で生まれた。上には31歳の兄、下には17歳の妹がいる。後述するように、出稼ぎ目的で先に来日した親戚の後を追うようにして、1996年に家族で日本へやって来た。小卒後すぐに働き始めた父は洗剤販売、短大卒の母は病院事務が来日前の職業であった。来日後は関西地方に居住し、両親は工場で働き（母は後に転職）、子どもたちは日本の学校に通った。兄は中卒後、工場を転々とした後に市役所の臨時職員として通訳の職を得たが、キャリアアップが見込めないことに限界を感じて日系人の妻と帰国した。現在は妻の両親が経営するスーパーマーケットを手伝っている。日本生まれの妹はスポーツ推薦で公立高校に入学し、高2の現在、大学進学を希望している。幼い頃からポルトガル語習得には消極的で、現在もほとんど話せない。マリアーナさん自身は、小学校から高校までを公立学校で過ごした後、私立A大学で学んだ。そして、大学院進学を機に実家のある関西地方を離れ、現在は関東地方に一人で暮らしている。

来日してすでに20年が経過するが、家族で長期にわたる帰国をしたことはない。ただし、マリアーナさんは短期の帰国をこれまでに5回経験している。4歳のときに6ヶ月、5歳、小5、中2のときにそれぞれ3ヶ月、大1のときに1ヶ月ほどのブラジル滞在経験がある。5歳までは親と一緒だったが、それ以降は親の帯同はなく、小5は兄と、中2は妹と、そして大1は単身で帰国した。帰国とはいえ、ブラジルに「自分たちの家はない」ので、在伯中は「親戚めぐり」をして過ごすことになる。したがって、「旅行とか帰省とかで帰るぐらいで、もう全然、住んだことはないですね」というのが、ブラジル滞在をめぐるマリアーナさんの実感である。

3 ブラジル系ニューカマーと「帰国の物語」

ブラジル系ニューカマー第二世代の成長過程において、日本での滞在に対する第一世代の意味付与は大きな影響力をもつ。キングらは、外国人労働者としてドイツへ移住したギリシア人を親にもつ第二世代を、親から「常に帰ると言われながら育った子どもたち」であるとし、「帰還をめぐる家族の物語」（family narrative of return）が第二世代の「帰還志向」におよぼす影響について論じた（King, Christou and Ahrens 2014, pp.42-43）が、ブラジル系ニューカマー第二世代がおかれた文脈もこれにかなり近いといえるだろう。

「移民」という政策用語が存在せず、体系的な移民政策を不要としてきた日本（近藤 2011）において、ブラジル系ニューカマーの入国と就労は、あくまでも公式には「日系人」（という「ネーションフッド」を根拠にカテゴライズされた人びと）が親族を訪問し、日本文化に触れることを目的としたものであり、かならずしも「労働力」の導入として認められたものではなかった。にもかかわらず、かれらがおこなっているのは紛れもなく出稼ぎである（梶田 2005）。とりわけ90年代後半以降、労働市場は利益最大化の論理を貫徹すべく、「フレキシブルな労働力」の確保に力を注いだ。「日系人」労働市場は、まさにそのような論理が剥き出しのかたちで露見する場であり、日系人労働者自身も、それに適応すべく自らの生活を就労中心のものへと編成していった。日系人は、公式には労働者ではない、潜在的なネーションとして相対的に「自由な移動」が可能であったがゆえに、市場の論理は国家の規制を受けることなしに、かれらの移住過程を支配できたのである。その意味で、日系人は「もっともむき出しの形で市場原理に翻弄されて」きた存在といえる（樋口 2005）。この現実は、2008年秋のリーマン・ショック以降に生じた日系人の大量失業・帰国によりますます浮き彫りになった（樋口 2010）。

このように、現実には出稼ぎ労働者として来日する日系ブラジル人が形成する「家族の物語」を、かつて筆者は「一時的回帰の物語」と名づけたことがある（児島 2006）。そこで描いたのは、滞在が目標金額を蓄えるまでの「一時的」なものであることを前提としつつ、他方で父祖の地への「回帰」としても自らの来日経験をとらえるかれらの意識のありようであった。ただし、日本への「回帰」という側面はあくまでも成人したニューカマーとして来日する第一世代の主観に注目したものであり、日本生まれあるいは幼少期から日本で育つ第二世代の経験をとらえようとしたものではない。第二世代の成長過程への影響という点で「家族の物語」としてより本質的なのは、滞在の一時性、すなわち帰国という前提であることからすれば、第二世代の経験を論じるにあたっては端的に「帰国の物語」としたほうが適切と思われるので、以下ではこの表現に統一する。

4 「帰国の物語」と教育戦略

マリアーナさんの両親が来日したのは1996年、彼女が2歳のときだった。ブラジルでは、父は洗剤販売、母は病院事務をしており、「特別、不自由な生活をしていたわけではない」が、先行して渡日した親戚の様子をみて「いい暮らしができる」と考え、自分たちもと日本へ向かった。あくまでも「短期で行って帰ってくる」ことが前提の出稼ぎであった。

来日後は関西地方に住み、父は途中1年半の失業をはさみ

ながらも工場で働き続け、母は工場勤務の後、自宅での子ども向けポルトガル語教室の運営を経てブラジル人学校の教師になった。そして、現在はその学校の校長を務めている。

短期の予定だった滞日生活は長期化し、数ヶ月の一時帰国を何度かはさみながらも、来日してすでに20年間が経過した。それでも両親においては「帰国の物語」はいまだ継続している。とりわけ父は、70歳で高齢ということもあり、懇意にしている親戚の住むブラジルに戻りたいという気持ちが強い。しかし、マリアーナさんの妹が現在高2で大学進学を希望していること、また、いま連れて帰ったとしても、ポルトガル語が話せないために適応がむずかしいだろうとの判断から、まだしばらくは日本にいるつもりでいる。

マリアーナさんが子ども期を生きた環境は、このように、いつかはブラジルへ帰るという親の意思を反映した「帰国の物語」に方向づけられたものだった。「帰国の物語」を生きる親は日本語習得に熱心ではなく、とくに父は、20年が経過した現在でも身につけているのは「ザ・片言」の日本語のみである。その一方で、マリアーナさんのポルトガル語取得に関して、母はきわめて熱心であり、自宅で自ら指導にあたった。

（ポルトガル語習得については）母がやっぱりきびしかったというのが、一番大きいのかな。私が小学校４年生、５年生ぐらいまでは家で教えていたので、毎年夏休みになるとビシバシみたいな感じで、ブラジルの教科書を使ってがっちり勉強していたのもあったので。

また、母がブラジル人学校に勤めだしてからは、マリアーナさんも日本の学校に通う傍ら週に１回そこに通い、ポルトガル語を学んだ。

働いて稼ぐことを第一と考え、「（日本が）学歴社会ということを、たぶん意識していない」父に比べ、母は大学に進学することの意義をそれなりには理解していたようである。マリアーナさんは、日本の学校で学ぶ内容について母から具体的なサポートを受けた覚えはないが、成績が下がると怒られていたという。また、後述する通り小学校でいじめを受け、登校意欲を失っていたときも、母は「『自分が悪い』と責めてくる感じ」で、学校を休ませてはくれなかった。

このように、マリアーナさんの親は、「帰国の物語」のもと、母語であるポルトガル語の継承を熱心におこなう一方で、日本の学校については、具体的な勉強のサポートはできないかわりに、通うこと自体を重視し、成績には努力のバロメーターとしてそれなりに注意を払っていたといえる。

５　トランスナショナルな生活と学校適応

では、このように「帰国の物語」に方向づけられた生活環境のなかでマリアーナさんはどのような学校生活を送ってきたのだろうか。以下では、彼女が生きるトランスナショナルな生活と学校適応との関連に注目しながら検討する。

(1) いじめと「帰国」経験

２歳で来日したマリアーナさんは、日本の保育園に通った後、公立小学校に入学した。小学校では、とくに男子生徒から「おい、ブラジル」など「ことばでちょっかいかけられることが多く」、自分が他と異質な存在であることを意識させられるだけでなく、ブラジル人であることに対して否定的な感情を抱くようになっていった。そうした状況に対してマリアーナさんがとった対処法は、できるかぎり周囲の日本人生徒に同化することであった。

○小のときは、一時期いじめられていたときがあって、そのときには、ちょっと自分が外国人だからなのかなとかというのを感じたことはありましたね。だから、何とかして日本人の子たちみたいになろうというのはあったんですけど。

だが、小５での３ヶ月のブラジル訪問は、そのようにして形成されたブラジル人に対する否定的なイメージに大幅に修正を迫る経験となった。親の同行なしで８歳年上の兄と一緒にブラジルを訪問した際、「親戚めぐり」による現地の人びととのかかわりを通じてブラジル人の魅力を実感し、自らのルーツ、名前、外見、ポルトガル語に「誇り」をもてるようになったのである。ブラジル人に対するこのようなイメージの転換により、日本において日本人から向けられるまなざしについても、かならずしも非難のために向けられるものではなく、「興味」からくるものととらえ直し、そうした「興味」に積極的に応えていこうと考えるようになった。

小学校１年生から５年生までのずっと日本にいる期間がやっぱり、ちょっと「ブラジル人か」みたいなところがあったんですけど。でも、そこでブラジル行って、また世界が広がったというか、そこで感じ方が変わって、全然オープンになりましたね。

――　そこをもうちょっと聞きたいなと思うんだけど。

自分のルーツとかも全然、誰でも言うようになりましたし、名前とかも結構、最初は言うのに勇気がいるというか、長いし、聞き取りにくいしというのでいろいろあったんですけど、でも全然、自分から進んで話すようになりましたし、何かそれまで質問とかされる、質問とか見られたりするのって、絶対何か自分に問題があるんだとか思ってたんですけど、ただ単純に興味があるんだろうなというふうに方向転換できたというか。言われているのは私がちょっとみんなと見た目がちがうから、何でなんだろうというので、きっと興味を持ってくださっているんだろうなというふうに考えがなって。見た目のこととかでも何か、目が大きいねとか言われたら、ちょっと人によっては「はあ」と、ちょっとなえる人とかもいるんですけど、私はむしろ「は～い」みたいな感じで、すごいポジティブに受け入れられるようになって。ポルトガル語ができるとか、そういうポジティブな面がたくさんあるんだなって、それを感じたというか、

別になえることじゃないなと思って、純粋に。
── やっぱり小５で向こうに帰ったときに、何か具体的な経験とかがあったの？何か力を与えてくれるような。
やっぱり人ですかね。何か国を否定するというわけじゃなくて、人を否定するような気がしたんですよね、それまでの自分が。ブラジル人というのを否定していたような気がして。でも、ブラジル人てこんなにすてきな人たちなんだというのをすごい感じたというか。だから、ブラジル人である自分に対しても誇りもっていいんだろうなって思えるようになったんだと思います。

このように、ブラジル訪問は、日本の学校において日本人生徒の前に明確にブラジル人として立つことを関係構築の出発点とするようにマリアーナさんの意識を変える一方で、日本に戻った後もブラジルに暮らす親戚との関係を維持したいという希望をかなえるべく、ポルトガル語の読み書きの習得に積極的に向かう契機にもなった。

（ブラジルから帰って）その「オーカット」（＝SNSを提供するサイト）を通じてブラジルのいとことかと話すときに、やっぱりポルトガル語をできないと全然会話にならないので、そういうので結構読みも書きも習得していきましたね。

⑵ 越境のための学業／学業のための越境

小５でのブラジル訪問を終え、小６になったマリアーナさんは、航空機の客室乗務員（以下、CA）になりたいという夢を抱くようになった。直接のきっかけは、当時放映されていたCAを主人公とするテレビドラマ『アテンションプリーズ』を見て、世界中を移動する仕事へのあこがれを抱いたことであった。ただし、こうしたあこがれは、ブラジル訪問やその後の親戚との関係維持にみられるような、マリアーナさんが生きるトランスナショナルな現実に下支えされたものといえるだろう。実際、マリアーナさんの夢を聞いた親との間にも、ブラジル訪問が容易になるという現実的な利点についての会話が交わされている。

（ドラマの影響が）強かったですね。何か世界に出てみたいな、みたいなのがすごいあって。旅行したいとか、ＣＡになったらどこでも行けるという。あと、親が結構喜んでくれたというか、ブラジルにただで帰れる。そういうので。

CAになりたいという夢が定まってからは、何をすべきかを意識的に考えるようになった。高卒資格が欠かせないことは小６の時点で認識しており、高校選択の際には英語に力を入れている学校であることを重視した。

（ＣＡを）めざしだしたのが小学校６年生とかだったのですね。だから、そのときから、もう少なくても高校は出なきゃいけないみたいなのはずっと、自分のイメージとしてあったので。英語を極めると思ったらやっぱり、そういうのに力を入れてる学校じゃないとだめだよなと思って、いろいろ調べてました。

英語については、中１の最初に半年ほど公文に通って「土台ができた」後は、とくに塾等には通っていないが、学校の授業では「人一倍がんばっていました」と振り返る。中３では英語スピーチコンテストに初挑戦し、地区大会で優勝して県大会に進んだ。その後、念願叶って県立高校の国際文化科に進学してからは英語力に一層磨きをかけ、スピーチコンテストで全国優勝を果たしている。さらに、高２からは選択科目としてスペイン語を勉強しはじめ、スペイン語のスピーチコンテストでも全国優勝を達成した。そして、それぞれの全国優勝の副賞として、ニュージーランドへ１週間、スペインへ２週間行けたことは、CAになるために大学では留学したいというマリアーナさんの願いをより現実に近づける経験となった。

私立A大学の外国語学部国際関係学科に進学したマリアーナさんは、在学中に２度の留学を経験している。最初は大学のカリキュラムの一環として参加したニュージーランドへの語学留学であり、１年生の冬に３週間ほど滞在した。そして、マリアーナさんにとって、それがなければ「たぶん、ここにいない」というほど大きな転機となったのが、２年生の秋から３年生の夏にかけてのポーランド留学であった。ポーランドの大学を選択したのは、大学の協定校であり、国際関係に関連する授業が多く開講されていたこともあるが、何よりも他と比べて費用がかからないからであった。留学に要する費用は、大学の留学支援金と「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」（官民協働海外留学支援制度）による奨学金を得て賄った。

ポーランド留学は、準備から実際の留学生活にいたるまで、マリアーナさんにはきわめて刺激的な経験となった。「トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム」に申請する過程では、留学には明確な目的と計画が必要であることに気づき、自らの経験と大学に入ってからかかわった外国人の子ども支援の活動を振り返りながら、移民の子どもをめぐる外国の教育事情に焦点化したテーマ設定をおこなった。そして留学先では、大学で留学生向けの授業を英語で受ける傍ら、現地の小学校を訪問して移民の子どもへのインタビューを実施した。その調査を通じて、政府の対策にも関わらず不就学が生じる現実を目の当たりにし、研究への意欲が湧いてきたという。

実際に現地ポーランドで小学校３つぐらいまわって、そこに通う移民の子どもたちにインタビューをして、それがちょっとプチ研究というか。自分のなかに、今まではＣＡだったんですけど、意外とこういうの楽しいなというふうに目覚めたというか。

さらに、留学先では大学院進学を当たり前に考える学生に囲まれていたことから、自らも大学院で研究を進めたいとい

う思いが新たに生まれ、CA になりたいという気持ちを凌駕するようになっていった。

大学院という選択肢も（当初は）なかったんですけど、結構海外だとみんな大学院に行くのが普通というか、そういう人たちに囲まれていると、大学院行ってみたいなというのが生まれてきて、ＣＡ自分ちがうわと思って、そこがきっかけでしたね。

大学卒業後は、留学先で思い描いた大学院進学の夢を実現し、現在は国立大学大学院の修士課程で教育学を学んでいる。修士課程修了後はヨーロッパの大学院で博士号を取得したいと考えており、将来的な職業としては、研究者もしくは国際移住機関（IOM）、ユニセフ、ユネスコ等の国際機関の職員を現段階では希望している。

６ 教育達成を支える諸資源

(1) 学業継続をめぐる不安要因とその克服

前節までの記述では、マリアーナさんの教育達成は、小学校におけるいじめを除いてさしたる障壁もなくなされたかのように感じられるかもしれない。だが、実際には、マリアーナさんの語りからは、順調な学業の継続を妨げかねない要因がさまざまなかたちで存在していたことが浮かびあがる。

第一に、「帰国の物語」に起因する居住地の不確かさは、しばしばマリアーナさんにとって円滑な学業継続を脅かす不安要素となってきた。たとえば、中２で妹と二人でブラジルを訪れた際には、リーマンショックと父親が病に倒れて失業するという事態が同時に発生したため、ブラジルへの永住帰国を覚悟した。これまでに、父が定年退職したら帰国すると聞かされ続けてきたこともあり、よいタイミングではないかと思えたからである。

中学２年生のときにブラジル帰ったときは、結構親から、父が定年したらブラジルに帰るというのはずっと聞いていたので、今（ブラジルに）残ったほうがいいんじゃないのかなと勝手に思ったりとかもしてたんですけど。ちょうど重なるようにしてリーマンショックと父が病気したんですね、動脈硬化になって。それで仕事やめたというのもあって、ちょうどそれが、私がブラジルに行ったときだったので、これは（ブラジルに）帰んなきゃいけないは、となって。（日本に）残るという選択肢もなかったので。でも結局（日本に）残ることになって。

結局、そのタイミングでの帰国は見送られ、マリアーナさんと妹は３ヶ月ほどブラジルに滞在した後、再び日本へ戻った。そして、無事に高校進学を果たしたものの、高２の時期はちょうど父が定年を迎える年にあたっていたため、マリアーナさんは、帰国の決行により高校での学びを断念せざるを得ないのではないかという不安にとらわれ続けた。

私のなかで、結構びくびくしてたんですね。高校２年生のときに、ちょうど父が定年迎える年だったんで、そんな、高校２年生で急に（ブラジルに）帰るというとどうしようとずっと思ってたんですけど、案外、何か（日本に）残ることにしてくれたので、よかったなと思いました。

結果的には、今回も帰国は実現されなかったが、「帰国の物語」が破棄されたわけではないことから、マリアーナさんの教育達成の背後には、つねに帰国による学業中断への不安が横たわっており、それを回避できるか否かは偶然に左右されるところであった。

学業継続を妨げかねなかった第二の要因は、慢性的な経済難である。とりわけ、リーマンショックの時期に１年半の失業を経験して以降の父の職は収入も不安定で、家計は「常に貧窮」状態であった。そのため、マリアーナさんは受験のたびに親と衝突を繰り返してきたという。高校受験は、父の失業で家計がきわめてきびしい時期と重なっていたため、親の理解を得るのが容易ではなかった。

父が失業していたのがあったので、そういうので（高校に）行くか、行かないかみたいな。私は日本に残りたいし、高校行きたいしと言っても、そんなお金ないの、どうやって行くのみたいなこともあったりしました。

こうした状況を打開するための窮余の策として、マリアーナさんは、入学の際にかかる諸費用を捻出するために、中３の夏休みを利用してアイスクリーム店でアルバイトに励んだ。

やっぱり何にせよ、お金の面ですよね。そこで結構、ちょっとブラックな話なんですけど、私、中３のときに実はバイトしているんですよ。自分の高校行くためのお金を稼ぐためにというか、もうこれをしないと私は（高校に）行けないとわかっていたので、そこは親に了承を得て、制服とか教科書とかそういうの買うためのお金も自分で稼いでということをやっていたので。

大学進学に関しても、複数の大学を受験せざるを得なかったため受験料がかさみ、進学の是非も含めて親と衝突した。

大学進学もたいへんだったな、私。Ａ大、第三志望だったんですよ。第一、第二、落ちちゃって。受験料すごいお金かかるじゃないですか。私、高２ぐらいでバイトやめて、ずっと受験勉強という感じでやっていたので、なかなか親に、じゃ３万円くださいみたいなのがなかなか言えなくて。

── 受験するのに。

それでお金が重なって。本当に行くのみたいな、受かってないのにどうやっていくのみたいなのがあったりとか、本当に今行く必要があるのかとか、そういうのがあったり

して衝突しましたね。

最終的には、4校受験したうちの2校に合格し、第三希望のA大学に進学することができたが、入学金の支払いをはじめ、入学後にかかる費用については課題が山積していた。

学業の継続をめぐってマリアーナさんが格闘しなければならなかったのは、経済難のみならず、進学に対する親の無理解もあった。これが第三の不安要素である。4節で論じたとおり、とりわけ仕事を優先する父親に進学の意義を理解してもらうのは容易なことではなかった。

母はまだ若干感じてはいると思うんですけど、大学とか大事というのはもちろん理解はしていると思うんですけど、父に関しては、たぶんそこまで思ってなくて、とりあえず働くみたいな、働いてお金を得ないとみたいなところがあるのかなと感じますね。だから、そういう意味でも、高校に進学すると言ったときは、「何で高校行くんだ」となったし、高校から大学入学するときも、「高校卒業したらＣＡになれるんじゃなかったのか」みたいなのがあって。最後、大学院なんか、「ああ～」という感じだったので。

では、マリアーナさんは、上述した経済難や進学に対する親の無理解にどのように対処して、学業を継続してきたのだろうか。

まず、経済的な課題については、学業の継続を支える経済的な支援制度を可能なかぎり利用した。高校では、県の国際協会が外国籍学生を対象に支給していた奨学金を3年間受給することができた。大学では入学金の支払いから壁に直面したが、これについては銀行から融資を受けることで切り抜け、その後4年間の学生生活は、日本学生支援機構の奨学金制度および生活福祉資金貸付制度を利用して乗り切った。こうした支援制度がなければ、大学には「絶対行けてなかった」とはっきり述べている。さらに、現在の大学院生活では、大学の授業料免除制度を利用し、給付型の奨学金を受給しながら、不足分は翻訳のアルバイトをして賄っている。

他方、進学に対して親の十分な理解を得ることは常にむずかしかったが、それを補って進学意志の維持を助けてくれたのが教師の働きかけであった。中学校に入って行動範囲や交友関係が広がったことで「ちょっと調子を乱して」、共働きの親に気づかれないように欠席や遅刻を繰り返した時期があったが、中2の担任であった英語教師から「がんばったら高校推薦してあげるから」と励まされたことをきっかけに勉強に「本腰を入れた」。中3の担任は、父が失業状態にあるという家庭状況を理解したうえで親身に相談に乗ってくれた。マリアーナさんは「先生はすごい好きで、学校の相談といったら先生だった」と振り返るが、実際、こうした教師に背中を押されながら、志望する高校に推薦で入学することができたのだった。

(2) 学びを多様に支える教会ネットワーク

マリアーナさんの学業継続を支える学校外の要因として見逃せないのが、彼女が所属するプロテスタント教会のネットワークである。この教会は、信徒のほとんどをブラジル人が占めるいわゆる「エスニック教会」（三浦 2015）として日本各地に支部を有しているだけでなく、そのネットワークは世界各国に張られている。こうした「トランスナショナルな宗教制度のコンテクスト」（Levitt 2002, p.133）が学ぶ機会の拡大に寄与する側面にも注目したい。

マリアーナさんは、大学卒業までは家族で、そして、大学院進学のために関東に引っ越してからは単独で、毎週土曜日と日曜日の礼拝に参加し続けている。教会への所属は、マリアーナさんの学校適応や教育達成をさまざまなかたちで支えてきた。第一に、教会は学校に関する悩みを共有できる仲間がいる場所だった。マリアーナさんの学校外でのつきあいはブラジル人が中心であり、とりわけ週末は教会の礼拝に参加するため、「あんまり学校の友達と遊べなくて、教会の子たちと一緒にいることが多かった」という。「教会の子たち」は、ただ信仰を同じくするだけでなく、家庭の社会経済的状況が似ていることから、日本人の同級生にはなかなか理解してもらえない悩みを安心して話すことができた。

教会の友達とかと、その（＝学校の）話をすることが多かったのかな。境遇が似ているというのが大きいというか。日本の友達に、私のお父さんが失業しているから、高校行けるかわかんないんだよねとか言っても、あんまり、ああそうかでちょっと終わるんですけど、教会の子たちだと、そういう似たような境遇の子たちがいたりしたので、相談しやすかったというか。

第二に、教会は異世代間の交流が頻繁におこなわれる場でもあった。マリアーナさんは子どもの頃から教会でオルガンを弾いていたため、それを通じて大人と交流することが多かったという。そして何よりも、教会での礼拝後に自宅を訪れる大人の話を、台所で料理や洗い物の手伝いをしながら聞くのが大好きだった。そうした大人のなかには、教会活動のためにブラジルから短期滞在の予定で来日した信徒が混じることもしばしばであり、ブラジルの近況について興味深い話を聞くこともできた。

みんな話が上手というか、すごい、会話がいつも深いというか。小さいころから結構、教会から家が近かったというのもあって、教会終わってからみんなが家に来るということがいっぱいあって、大人の話を聞く機会がたくさんあったんですよね。それを聞くのがすごい好きで。日本に住む人だけじゃなくて、ブラジルからちょっと一時的にミッションみたいな感じで来た人とかも、よく家に来てたりしていたので、その人たちからブラジルの様子を聞いたりとかというのがすごい楽しかったですね。

このような教会への参加を通じて培われた大人とのコミュニケーション能力は、学校で教師とかかわる際の障壁を低くし、

相談できる関係の形成に寄与したものと思われる。

第三に、マリアーナさんの教育達成において教会の越境的なネットワークが果たした役割も重要である。ポーランド留学中、マリアーナさんは近隣諸国を訪問しているが、その際には、面識はなくとも同じ教会の信徒であるということで自宅に宿泊させてもらえたという。

留学したときも、すごい教会の人たちにお世話になって。いろんな国に行かしてもらったんですけど、そこも全部教会の人の家に泊めてもらって。全然知らない人なんですけど、今まで会ったことない人とかでも泊めてもらって。

また、大学院進学のため、実家のある関西を離れ、関東で一人暮らしを始めるにあたっては、アパートが決まるまでの宿泊や引っ越しの作業なども、教会関係者が手伝ってくれた。

（教会関係者には）もう、すっごいお世話になりました。もう果てしなくお世話になりました。私、家が決まらなかったというのも、初期費用がなくて、全然お金がなくて、どうしよう、どうしようと困っていたときに、東京に住んでいる教会の人が、うちに泊まんなよ、全然、家見つかるまでいてくれていいよと、１週間いさせてもらって、引っ越しも教会の人に手伝ってもらってというかたちで、いろいろお世話になりました。

このように教会を通じた越境的なつながりがあることにより、慣れない土地での一人暮らしも「安心感」をもって始めることができた。そして、こうした越境的なつながりは、教会が全国の信徒を集めて定期的に開催する集会に参加することで、緩やかに形成・維持されてきたものであった。

7 まとめ

本稿では、ブラジル系ニューカマー第二世代のトランスナショナルな生活が教育達成におよぼす影響について、大学さらには大学院への進学を果たしたマリアーナさんの生活史によりながら分析してきた。以下では、本稿の知見を整理したうえで、その含意について論じていく。

まずは、マリアーナさんの生活史から浮かびあがるトランスナショナルな生活と教育達成との関連についてまとめよう。第一に、マリアーナさんは、出稼ぎ意識を保持し続ける親のもと、将来的な帰国を見据えた「帰国の物語」を親と共有しながらも、ある程度の緊張関係を保ちながら学校生活を送ってきた。親が日本の学校に通うマリアーナさんに学習面等で具体的なサポートをすることはできず、また、高校や大学への進学を積極的に奨励するということはなかったが、少なくとも義務教育段階では、学校に休まず通い、まじめに勉強することには価値をおいていた。他方で、ポルトガル語については母自らが指導にあたるなど積極的な継承がなされ、中１では英語習得のため公文に通わせていた。以上からすれば、マリアーナさんの親がとった教育戦略は、志水・清水編（2001）において南米系ニューカマー家庭の教育戦略として抽出された三つの特徴、すなわち、積極的な母語・母文化継承、日本文化伝達の場としての学校への期待、市場価値のある言語習得の奨励に、概ね合致したものといえるだろう。

第二に、こうした「帰国の物語」は、第二世代に対してつねに移動を意識しながらの生活を強いるため、マリアーナさんにおいてもとりわけ学業継続をめぐる不安要因を生みだしていたが、その一方で、移動をめぐる意義や価値の形成にも開かれていた。たとえば、いじめによりブラジル人であることに消極的になっていたマリアーナさんは、小５のブラジル訪問を機にブラジル人らしさを肯定的なものとして再定義することで、友人関係における自らの位置取りを変えると同時に、ブラジルに暮らす親戚とのつながりを維持するための努力を積極的におこなうようになった。フォナーやスミスが述べるように、ホスト社会において同化圧力を感じたり排除を経験している第二世代にとって、トランスナショナルな絆は、しばしばセーフティネットとして働き、抵抗のための資源形成に寄与しうるのである（Foner 2002, Smith 2002）。そして、こうした経験が、マリアーナさんの生活をより自覚的にトランスナショナルな方向へと向かわせていったものと思われる。学業面では大学時代の留学、職業面では最初に希望した CA、そして現在希望する研究者や国際機関職員、いずれもトランスナショナルな実践によって特徴づけられるものであるが、その基盤には、「帰国の物語」のもとで奨励された複数言語の習得があることも見過ごすことはできない。

第三に、マリアーナさんの教育達成は、多元的な支えが存在することにより可能になったこともあきらかになった。進学のための最大の障壁は経済難であったが、これについては、奨学金や生活福祉資金などの制度を利用することで克服することができた。進学について親の理解を得ることは容易ではなかったが、信頼できる教師の指導や励ましにより、進学意志を喪失することはなかった。また、学校生活を安定して送るうえで、教会の人間関係は重要な役割を果たしていた。そこで形成されるブラジル人の仲間集団は、日本人をマジョリティとする学校でときとして感じる疎外感を軽減する緩衝材として機能した。また、教会での異世代間の交流を通して培われた大人とのコミュニケーション能力は、学校で教師とかかわる際の障壁を低くした。さらに、全国にあるいは国境を越えて広がる教会のネットワークは、留学や大学院進学など、新たな地に立つマリアーナさんをさまざまなかたちで助け、「安心感」を提供していた。

では、これらの知見からいかなる含意を引きだせるだろうか。第一に、学校適応ないし教育達成とトランスナショナルな生活は、かならずしも排他的な関係にあるわけではないということがあげられる。マリアーナさんの例では、学校での同化圧力がトランスナショナルな生活に意味や価値を発生させ、そこで生みだされた意味や価値が、翻って学校の同化圧力への緩衝材として働くことで学校生活を安定化させ、学業

達成を下支えしていた。そして、学業達成は、複数言語の獲得や外国での経験をともないながら、トランスナショナルな志向を一層強化していった。ニューカマー第二世代の学校適応や教育達成が一国内でなされる（べき）との想定からその成否を論じるのではなく、トランスナショナルな生活を多様な仕方で生きる第二世代の現実に寄り添った理解や支援が必要であろう。

第二に、セーフティネットが多元的に存在することの必要性を示すことができるだろう。教育達成にいたるマリアーナさんの生活を特徴づけていたのは、困難な状況に直面するたびに、資源の不足を補う制度やネットワークを利用できたことであった。家庭の経済難を奨学金等の制度で補い、進学に対する親の無理解を教師の励ましで補った。学校の同級生との間で感じる疎外感や慣れない土地での不安の軽減には、教会のネットワークが大いに役立った。逆に言えば、マリアーナさんとて、直面している困難に見合った資源調達ができなかった場合、希望通りの教育達成がなされたかどうかは疑わしい。教育達成において第二世代が直面する困難は一様ではなく、制度や組織ごとに提供しうる資源の内実も異なることを考慮すれば、資源の種類やそれを提供する場は、できるだけ多様で多く存在することが望ましい。困難に応じた臨機応変な資源調達ができてこそ、グローバル化と個人化が同時に進行することにより、ますます複雑化する移行過程に対処することが可能になる。エスニック・コミュニティの重要性も、この文脈においてあらためて強調される必要があるだろう。

〈参考文献〉

Foner, N. 2002, “Second-Generation Transnationalism, Then and Now” in Levitt, P. and Waters, M.（eds.）*,The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation,* 242-252, New York:Russel Sage Foundation.

ハヤシザキカズヒコ・山ノ内裕子・山本晃輔　2013,「トランスマイグラントとしての日系ブラジル人―ブラジルに戻った人びとの教育戦略に着目して」志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛治致・ハヤシザキカズヒコ編『「往還する人々」の教育戦略―グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』明石書店, pp.206-267

樋口直人　2005,「共生から統合へ―権利保障と移民コミュニティの相互強化に向けて」梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の見えない定住化―日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会, pp.285-305.

樋口直人　2010,「経済危機と在日ブラジル人―なにが大量失業・帰国をもたらしたのか」『大原社会問題研究所雑誌』622,pp.50-66.

梶田孝道　2005,「国民国家の境界と日系人カテゴリーの形成―1990 年入管法改定をめぐって」梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の見えない定住化―日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会, pp.108-137.

King, R., Christou, A and Ahrens, J. 2014,“Diverse Mobilities”:Second-Generation Greek-German Engage with the Homeland as Children and as Adults” in King, R. ,Christou, A. and Levitt, P. (eds.), *Links to the Diasporic Homeland:Second Generation and Ancestral ‘Return’ Mobilitieas*, 33-51, London:Routledge.

児島明 2006,『ニューカマーの子どもと学校文化―日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房.

児島明　2016,「越境移動と教育―トランスマイグラントの時代における自立の支え方」志水宏吉編『岩波講座 教育変革への展望 2 社会のなかの教育』岩波書店, pp.201-228.

近藤敦 2011,「多文化共生政策とは何か」近藤敦編『多文化共生政策へのアプローチ』明石書店, pp.3-14.

Levitt, P. 2002, “The Ties That Change:Relations to the Ancestral Home over the Life Cycle” in Levitt, P. and Waters, M.（eds.）*,The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation,* 123-144, New York:Russel Sage Foundation.

三浦綾希子　2015,『ニューカマーの子どもと移民コミュニティ―第二世代のエスニックアイデンティティ』勁草書房.

大曲由起子・高谷幸・鍛治致・稲葉奈々子・樋口直人 2011,「在学率と通学率から見る在日外国人青少年の教育―2000 年国勢調査データの分析から」『アジア太平洋研究センター年報』8 号, pp.31-38.

志水宏吉・清水睦美編　2001,『ニューカマーと教育―学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店.

Smith, R.C. 2002, “Life course, generation, and social location as factors shaping second-generation transnational life” in Levitt, P. and Waters, M.（eds.）*,The Changing Face of Home:The Transnational Lives of the Second Generation*, 145-167, New York: Russel Sage Foundation.

高谷幸・大曲由起子・樋口直人・鍛治致・稲葉奈々子 2015,「2010 年国勢調査にみる外国人の教育―外国人青少年の家庭背景・進学・結婚」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第 39 号, pp.37-56

山本晃輔　2014,「帰国した日系ブラジル人の子どもたちの進路選択―移動の物語に注目して」『教育社会学研究』第 94 集, pp.281-301.

山ノ内裕子　2016,「ブラジルへ帰国した日系人の若者たちの進路とエスニック・アイデンティティ―トランスマイグラントとしての経験から」『関西大学人権問題研究室紀要』第 72 号, pp.23-46.

（本研究は，平成 29～31 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）「ニューカマーの次世代育成実践に関する世代間比較研究」（研究代表者：児島明，課題番号 17K04689）に基づく研究成果の一部である。）